

2019年度若手研究者共同研究プロジェクト実施報告書

法政大学総長 殿

以下のとおり研究実施報告書を提出します。

基 本 情 報	研究課題名：風刺画家たちの人的交流と表現手法における相互影響環境に関する研究
	研究代表者 氏名： 深松 亮太
	(在籍者) 研究科・専攻・学年： (修了者) 所属・職種：社会学部 兼任講師
	指導教員(所属・職・氏名)： (※在籍者のみ記入)
	共同研究者(所属・職・氏名)：国際文化研究科 教授 熊田 泰章 (※指導教員と同一の場合は記入不要)
	その他 研究分担者：
	研究期間： 2019 年度 ～ 2019 年度 (※研究修了年度を記載)
年 間 の 研 究 実 施 概 要	<p>※研究計画の進捗状況を中心に今年度の研究実施状況を記載してください。</p> <p>本研究は、風刺画家たちの人的交流関係に注目し、その交流が風刺画の定型表現に与えた影響について考察することを目的として実施した。3カ年の計画でスタートした本研究では、20世紀転換期初頭の当初において風刺画掲載が積極的に行われていた二大都市であるニューヨークとミネアポリス・セントポール地区を中心とし、美術学校や新聞社等での資料調査を通じて、風刺画家と編集者、ジャーナリストたちとの交流関係を明らかにしていくことを企画した。本年度(2019年度)には、電子アーカイブス『Newspapers.com』を主とした分析を行いつつ、図像研究に関連する先行研究の収集にあたった。</p> <p>本年度の研究の進捗状況としては、第1に、図像研究・記号論をはじめとしてイメージ研究に隣接した分野の書籍を収集し、検討を進めてきた。特に Arthur Schopenhauer, <i>The Art of Controversy</i> は、20世紀転換期に活躍した風刺画家に関する詳細な説明が多く記述されており、画家たちの交流関係を明らかにしていく本研究に大きく寄与するものであった。</p> <p>第2に、研究代表者は、本プロジェクトの助成を受けて購読した電子アーカイブス『Newspapers.com』を通じて、史料の収集と分析を進めている。研究代表者は、2017年9月に提出した博士論文において、ノースカロライナ州出身の風刺画家ノーマン・ジェネット(Norman E. Jennett)の風刺画を検討したのだが、この電子アーカイブスを通じて、彼がニューヨークの新聞に提供していた風刺画を網羅的に収集することが可能となった。ジェネットのニューヨークにおける活動については、博士論文執筆の過程で収集したジェネットの個人文書(ノースカロライナ大学所蔵)でのみ確認していたが、新聞の原資料を確認できたことで、ジェネットの活動の詳細を明らかにできることを期待している。今後の研究では、この電子アーカイブスの購読を継続して、ニューヨーク州で発行されていた他の新聞に掲載された風刺画との比較分析を行うことを計画している。この成果については、2020年7月に</p>

予定されていた日本国際文化学会全国大会にて報告する予定であった。研究代表者は、本プロジェクトの助成によって明確な見通しをもって、共通論題「視覚化された資料：表象をとおして読み取る交流関係とその資料的意義」を計画し、中国の絵画分析を専門とする安田震一氏(多摩大学副学長)と共に研究報告を行う予定であったが、昨今の状況を鑑みて中止となった。研究代表者は、今年度に勧めていく分析結果を投稿論文としてまとめると共に、先述の共通論題企画を発展させて、2021年7月に報告することを計画している。

2019年度の研究成果としては、以下の3点を挙げるができる。第1に、日本国際文化学会第18回全国大会での共通論題コーディネーターである。「『暴力』と表象：政治と文化の接合点の模索」と題した本企画では、時代と地域を越えて広く行われてきた「暴力」や「抑圧」といった行為が如何に表象されてきたのか、あるいは表象という行為そのものが有した政治性について検討することを目的とした。また、この企画では、国際文化研究科の同窓である田島樹里奈、月野楓子の両氏と合同での報告を行うことによって、同研究科の学際性を学会において示すことができた。本共通論題聴講者数は、セッション終了時点で37名であり、多分野にわたる多くの研究者からの質問・コメントを得ることができた。

第2に、上記共通論題で行った研究報告「『支配』の表象とプロパガンダ：政治における『逆転のレトリック』と他者恐怖の醸成」では、研究代表者がこれまでに検討してきた「支配をめぐる表象」について紹介し、文化と政治が表象という行為を通じていかなる作用を持ち得るのかを検討する議論を促した。

第3に国際文化表現学会に提出した研究ノート(査読付)「風刺画描写における表現手法の国際移動—*Review of Reviews* とアメリカ諸紙を事例として」では、博士論文で検討した風刺画描写の国際移動について、新たに得た知見をもとに本プロジェクトの助成を受けて得た資料を用いつつ検討した。

2020年度以降の研究では、2019年度の研究をベースとした分析を進めつつ、アメリカ合衆国での資料調査を実施することで、20世紀転換期に活躍した風刺画家たちの交流関係についてさらなる検討を進めていく。

成果発表（学会・論文・研究会等）			
	学会・論文・研究会等の別	タイトル	発行または発表年月
研 究 業 績	日本国際文化学会 第18回全国大会 共通論題コーディネート (査読付)	「『暴力』と表象－政治と文化の接合点の模索」	2019年7月6日
	日本国際文化学会 第18回全国大会 研究報告(査読付)	「『支配』のプロパガンダ－ 政治における『逆転のレトリック』と他者恐怖の醸成」	2019年7月6日
	『国際文化表現研究』第16号 研究ノート(査読付)	「風刺画描写における表現手法の国際移動－ <i>Review of Reviews</i> とアメリカ諸紙を事例として－」	2020年3月